

# 東日本大震災における音楽音響医学分野の取り組み

音楽音響医学分野 教授 市江雅芳  
助教 大寺雅子

## 1. 災害臨時FM局への音楽CD提供

3月末の段階では、インターネットの情報によると被災地の避難所でコンサートや音楽イベントを提供するボランティア活動が徐々に始められつつあったが、現地の実態がつかめていない状態で出かけていくことは、依然、差し控えるべき状況であった。このような中で、それぞれの被災地において災害臨時FM局が開局したという情報が入ったため、これらのFM局に音源供給を行うことを考え、現地におけるニーズの調査を電話で行った。

その結果、山元町と亘理町から音源送付の希望があった。各局ともに、緊急時に備えて夜間も放送し続けている状況であったため、深夜の放送にふさわしい音源が必要とのことであった。各局の担当者と話し合った結果、オルゴールやイーजीリスニングのCDを送付することになった。

夜間放送なので、CDはリピート再生されており、同じ曲が何度も放送されていた。これを避けるために、できるだけ多くの曲が1枚のCDに入っていることが先方の希望であった。しかし、各局が使用している放送機材が古いものであり、MP3などの圧縮音源の再生が可能かどうか不明だったため、通常音源と圧縮音源の2種類のCDを送るなどの工夫が必要であった。

後日、各局から礼状をいただいた。

## 2. 日本音楽療法学会へ音楽療法士対象の講習会を提言

震災後、被災地支援の目的で様々な団体による講習会やセミナーが開催されていた。そこで、日本音楽療法学会に対し、被災地で活動する音楽療法士に向けたPTSD等に関する講習会の開催を提案した。こちらの働きかけの結果かどうかは不明であるが、日本音楽療法学会の被災地支援活動の一部として、会員向けの講習会が行われた。

## 3. 仮設住宅での音楽活動

音楽療法の特性を考慮すると、本格的な支援活動を開始することができるの

は、支援フェーズが仮設住宅の段階に入ってからであることが予測された。そこで、5月初旬から、仮設住宅で住民のための見守りプログラムを行う NPO 法人と連絡を取り、彼らを通じて仮設住宅での支援活動の可能性を調査し始めた。

この時点では住民の仮設住宅への移動が完了していなかったため、生活環境が整う段階までしばらく待つ必要があった。そこで、NPO 法人が活動を行う仮設住宅に足を運び、現地の状況を視察し、住民と話しをすることでニーズを探っていた。また、他のボランティア団体が提供する支援活動に参加することで、仮設住宅での活動がどのようなものか体験する機会を得ることもできた。

これらの準備期間での情報や経験をもとに、住民同士の交流を促進する機会を提供するための歌唱グループを計画するに至った。この歌唱グループは、「懐かしの昭和歌謡を楽しむ会」として第1回目は8月最終週に行われ、現在も継続している。会の内容は、昭和を代表する歌謡曲の歌詞本を参加者に配布し、その中からリクエストを募りながら参加者全員で歌うというものである。音楽療法士が参加者の歌にキーボードで伴奏し、合間に会話を楽しみながら会は進行する。終了後には茶話会を行い、参加者同士の交流の場となっている。

#### 4. 大野和士氏（フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者）の石巻赤十字病院での被災地支援ボランティア・コンサートをサポート（2011年9月7日）

震災直後、関東在住のクラシック音楽プロ演奏家から、被災地で演奏を行いたいという問い合わせがあった。しかし、実際に避難所へ出向いた仙台在住の演奏家が、「ここは皆が寝る場所なのだから、演奏しないでくれ」と、被災者から直接断られたという話も伝わってきており、演奏家が被災地に入るには、まだ時期尚早であると判断した。

同じ頃、フランス在住の国際的指揮者である大野和士氏（フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者）から、沿岸部の被災地の病院で院内コンサートを開催したいと連絡があった。開催時期を訪ねると、9月とのことであった。震災から半年を経過する頃であり、その頃になれば、沿岸部の被災地でもクラシック音楽の演奏家を受け入れられるのではないかと判断し、石巻赤十字病院に打診したところ、飯沼一宇院長（東北大学名誉教授）から快諾をいただいた。

9月7日に大野氏および4人のオペラ歌手と一緒に病院を訪ねると、震災直後は野戦病院のような状況であったこの病院も、すでに災害支援の医療団は引き揚げ、平常の落ち着きを取り戻していた。大野氏の意向は、患者および家族、病院スタッフの方々に、つかの間でも良いから安らぎを感じて欲しいというも

のであった。大野氏のピアノ伴奏と解説で、オペラの名場面が歌い上げられ、院内に大きな感動を生んでいた。



石巻赤十字病院ロビーにて

## 5. 「大野和士の、こころふれあいコンサート 2012」をサポート。 (2012年6月9日)

震災から1年以上が過ぎた2012年6月、大野和士氏は再び4人のオペラ歌手と共に、被災地を訪問した。

6月9日(土)には、昨年は実現できなかった東北大学病院でも開催された。開演に先立ち、大野氏のたつての希望で、小児病棟でもミニ・コンサートが催された。

当日は、外来ロビーが工事中であったため、病院スタッフの努力で、ホスピタル・モールに会場が設営されたが、吹き抜けの空間に素晴らしい歌声が響いていた。

車イスと点滴スタンドで来場される患者さんも多く、中には、大野さんのす

ぐ前で演奏を楽しむ小さなお客さんの姿もあった。



東北大学病院ホスピタルモールにて